

環日本海圏内の港湾都市の見直しに関する考察

— 軍港及び港湾都市である韓国鎮海^{ジンヘ}の国際観光化に向けて —

全 相 鎮（東洋大学大学院生）

1. 背景及び目的

今日、観光は地域において地域経済波及効果だけでなく、地方文化の活性化、人的交流等社会的・文化的効果が得られるということで観光事業の魅力はますます高まっている。また、観光開発は理想的な町づくりであるというような考え方も可能となっている。

そこで、本稿では観光産業を通じ、地域を活性化させることを考え、モデルとして韓国の鎮海（ジンヘ）という軍港及び港湾都市を中心に港湾都市ならではの観光開発による地域の活性化を図ることを目的とする。

また、環日本海圏内に位置している地域は港湾都市を中心に国際観光を進めるのが最善であるという考え方をもとに「鎮海（ジンヘ）を中心にとどのような相互観光交流が必要であるか」を考察する。

2. 内 容

鎮海は韓国で、今まで観光的な部分よりは海軍基地および、海軍士官学校の立地としてよく知られてきた。しかし、現在「新港湾建設事業」と「海洋公園造成事業」をはじめ、鎮海という地域の活性化を図ろうとしている。

そこで、近隣国の港湾都市である日本の横浜「みなとみらい21」は鎮海の新港湾建設に当たったの、良いモデルとして考えてみる。

横浜「みなとみらい21」は歴史的資産の保存

という「旧」と新港湾開発及び都市計画という「新」の調和だけではなく、国際会議場・展示場等の国際交流といった現代の世界動向にもしっかりと、応じていることはこれから、新港湾開発及び都市計画及び観光計画の見直しに当たっている鎮海にとって良い手本であろうと思われる。

ところで、鎮海は海岸線を利用するのに、海岸沿いの軍事施設をはじめ、都市計画と港湾計画の不調和、無分別な水面埋め立て、海岸汚染の急増といったいくつかの問題を抱えている。しかし、このような問題を「新港湾建設事業」と「海洋公園造成事業」を中心に例としてあげた日本の港湾都市のように、国際的な都市空間創出に相応しい構造の港湾都市づくりに励まなければならない。

そのため、経済自由区域計画を中心に国際会議場及び展示場の建設、鎮海の国際観光振興のための軍の努力、国際交流の促進などを通じ国際化に向けた政策の推進が必要である。

その国際交流を通じた国際化には環日本海圏内の他港湾都市との連携による、貿易・観光交流を図らなければならない。特に鎮海は都市の歴史上、環日本海において他地域との共通的文化要素をたくさん持っている。しかし、その共通の文化を活かし、国際交流を深めていくに当たって、軍事都市ということが一番大きな壁になっていると思われる。このような問題を解決するためには、国際観光の活性化に欠かせない要素として平和問題が世界中で唱えられているが、その平和問題の解決のため軍事施設を無くすのがもっともだが韓国の

現状では不可能であろう。そこで、大事なのは上述した軍の努力、そして、軍事施設、事業に関わる規制を緩和するべきであろう。従って、国際観光振興に軍の協力が含まれることによって、また、新しい魅力を創出することができるだろうと思う。

また、鎮海特有の文化を活かした観光開発と地域社会の参加により、鎮海ならではの観光商品づくりに励まなければならないのであろう。

3. 結論

鎮海は年中温和な海洋性気候及び、107Kmという海岸線の長さなど、海洋性資源の豊富さからみると非常に可能性の高い観光潜在力をもっている。しかし、海岸線沿いに海軍が立地していて、開発が困難であったという付加的な要素もあったかも知れないが海洋性資源を活かした観光開発はそれ程活発に行われていなかった。

しかし、現在「鎮海新港湾建設事業」や「鎮海海洋公園造成事業」を進めており、国際的な港湾都市として、国際的観光都市としての立地を固めようとしている。そこで、「鎮海新港湾建設事業」

と「鎮海海洋公園造成事業」をきっかけに今まで、それ程活発に行われていなかった海洋性観光資源を最大に活用しようとしているが、鎮海を港湾都市として、港湾の機能だけではなく都市の機能も重視しバランスの取れた空間創出が必然的に要求されている。

また、鎮海の隣には釜山という韓国最大の港湾都市が位置している。その釜山も今までの貿易港としての活気を失いかけている。これを釜山と連携を取り、鎮海が釜山の背後地としての機能を果たすことにより、上述した「新港湾建設事業」ももっと大きな効果が得られるだろうと思う。また、釜山との連携により鎮海と釜山を含む地域が環日本海圏内において最大の国際的な港湾都市として成長できる可能性が大きいと思う。

また、上述した先進国の事例を模倣するのではなく、その開発に当たっての基本原則を取り入れ、地域住民にはより快適な都市空間として、外部の人には鎮海ならではの独特な海洋性観光の提供ができるようにしなければならない。従って、内外に鎮海の魅力を発散できることにより、より活気の溢れる地域として成長していくのであろう。

COMMENT

内 山 清（青森中央学院大学）

国際観光活動による経済波及効果が大きいことは、産業連関表などを利用した数量分析で明らかにされている。宿泊業や飲食業、交通業などを通じて地域の幅広い産業に効果が波及していく。さらに、経済効果にとどまらず、社会・文化的な諸効果も見逃すことができない。観光客を迎える快適な空間や地域文化の伝承などは、地域の人々にとって優良な資産であり、豊かな生活を支える基盤となっている。

金氏の報告は、海軍基地がある韓国鎮海において、新港湾建設や海洋公園造成の機会を捉えて、国際観光化の途を探るものである。日本の横浜

「みなとみらい21」や神戸のベイエリア開発などを参考にして、コンベンション機能やレクリエーション機能などを有する総合的な港湾空間の創出を提案すると共に、軍港特有の景観や雰囲気も活用するという発想であり、夢の多い報告であった。

ここでは、幾つかの視点からコメントをさせて頂き、鎮海の国際観光化に向けた戦略を補強したい。第1には、隣接する釜山と競合するのではなく、良好な補完関係を築くことである。40分の時間距離的では域外からは同一の物流センターと見なされ、観光活動においても釜山の鎮海地区としてアピールすべきである。第2には、港湾整備に

長い時間がかかることを前提として、今すぐに行動できる“鎮海の桜”を釜山と一緒にPRすべきである。“鎮海の桜”は全く知られていないが、釜山の知名度で売り込むことは可能であり、このような共同事業を通じて両都市の対立構図を緩和

していく必要がある。第3には、鎮海に残っている優れた景観を大切に保全していくべきである。そして第4には、経済波及効果を推計して、国際観光化への取組み意識を高めていくことが期待される。

名古屋の国際化と環日本海

中 藤 康 俊 (中部大学)

2005年2月17日中部国際空港が開港し、3月25日から9月25日まで「愛・地球博」(通称 愛知万博)が開催された。名古屋入国管理局によれば、中部国際空港を使って出入国した外国人は名古屋空港の前年同期に比べて49.9%増え、39.9万人に達したことがわかった。中部国際空港の開港による新規路線の就航や増便のほか、愛知万博の効果が大きいといえる。愛知万博は当初心配されていたが、徐々に入場者が増え、7月17日には1日の入場者は開幕以来最多の21万人を数え、1500万人という目標を大幅に上回るものとみられている。東海5県(愛知、岐阜、三重、静岡、長野)の航空貨物輸出の中部国際空港へのシフトが急速に進んでいる。名古屋税関によれば、5県の輸出貨物のうち2004年3月名古屋空港を経由した比率は24%であったが、2005年3月には中部国際空港経由の比率が48%にまで上昇した。また、名古屋港の貨物取扱量も日本一である。

中部国際空港、愛知万博のいずれも世界に開かれた窓口となるものであり、国際的な交流の進展が期待されている。これまで、名古屋という地名は東京や大阪に比べると知名度が低かっただけに地元の期待はことのほか大きい。明治以来、名古屋は博覧会をたびたび開催しており、博覧会をテ

コにして発展してきたといっても過言ではない。1937年に開催された名古屋汎太平洋博覧会は29カ国が参加し、入場者数も480万人という当時としては大規模なものであった。博覧会を契機に東山動植物園が開園され、当時東洋一とうたわれた名古屋駅が完成した。戦後における名古屋の国際化の第一歩は1964年に世界銀行の借款によって愛知用水が完成したことであり、当時「世紀の大事業」といわれた。その後、1966年にはワイズマンによる中部圏整備計画、71年の国連訓練センターの設置、81年のオリンピック誘致の失敗とつづき、今回の中部国際空港の開港と愛知万博の開催でいよいよ本格的な国際化時代を迎えたといっても過言ではない。

それでは、名古屋の国際化の特徴はどこにあるのか。次の4点を指摘したい。

その①は、今までの博覧会が開発優先の博覧会であったのに対し、愛知万博は「自然の叡智」をスローガンに「環境」を前面に押し出した博覧会である。種々問題がありながらも、開催によりよくこぎつけた万博である。今後、「環境」をキーワードとして国際化が進められるかどうかである。万博の跡地は本格的な防災の中核拠点として整備される予定であるが、それがふさわしいかど